論文要旨

多極共存型民主主義の終焉

－1960 年代のベルギーの列柱と政治的エリート－

国際社会科学専攻（国際関係論分野）
97506
松尾秀哉

１．問題の所在

ベルギーは複雑な歴史を有する西欧の小国である。建国以来、ベルギーは内的にフランス語を話すワロン民族と、オランダ語を話すフランデレン民族という二つの民族を抱え、19 世紀末以降、フランス語話者の政治的・経済的優位に抵抗するフランデレン運動を経験しながらも、それでも政治的安定を維持してきた。この点でベルギーは、「多極共存型民主主義」国家の典型的な例として挙げられる。これらの国家では、深刻なクリーヴィッジを有しているため、安定的な民主的政治体制の達成と維持は困難だと考えられてきた。しかし、それでもこれらの国家群は、「卓越したエリート」の存在と行動によって対立を回避し、長期に亙る政治的安定を維持してきた。レイプハルトによれば、「多極共存型民主主義においては、多元社会に固有の遠心的傾向は、異なる分断区画のリーダーの、協調的態度と行動とによって相殺される。エリートの協調が多極共存型民主主義の第一の顕著な特徴」である。

しかし 1960 年代に入り、ベルギーでは両言語の対立が激化した。とくに 65 年の選挙では言語主義政党の台頭を招き、カトリック、社会党という二大政党が一気に得票率を落とす。しばしばこれは「ベルギー多極共存型民主主義の終焉」と形容される、政党システム・レヴェルの歴史的分水嶺であった。その後、伝統ある（フランデレン地域にありながらフランス語を教育言語として使用していた）ルーヴァン大学の分割・移転問題をめぐり、1968 年には政権が崩壊し、その処理をめぐって建国以来ほとんどの政権に加わっていたカトリック政党が地域政党へと分裂するに至る。その後、他の既成政党も次々と分裂するに至り、その対応としてベルギーは、分権化・連邦化改革を進めることになる。最終的に 1993 年、地理的な「地域」のみならず、属人的な「言語」の相違をも構成要素とする、多層的に構

成される連邦国家となった。

では、この「言語問題」が、「紛争」や「戦争」と称され、国家改革を余儀なくさせるほどにまで高揚したのは何故か。この点について、従来の研究では、経済不況やクリーヴィッジの変化など、いわゆるベルギーの政治社会的次元の変化に注目することで、言語問題の高揚を説明してきたと言える。しかしその高揚の原因を指摘するだけでは、おそらく説明は不十分であろう。実際に言語問題の高揚を、ベルギーは過去幾度と経験したからである。にもかかわらずこれらの高揚はその都度解決されてきた。しかし、60 年代の高揚については、それに対処しえなかった。つまり、エスニック運動の高揚に加えて、そもそもそれを受け止めるべき体制側、国家側に、その時期、なんらかの問題が生じていたのではないか。

ベルギーが古典的な多極共存型民主主義国家であることを考慮すれば、これらの国家群の安定を維持していくための最重要要件として挙げられている「政治的エリートの協調的行動」に注目して、この時期のベルギー政治を再考していく必要があろう。本研究では、ベルギー政治において中心的役割を果たしてきたカトリック政党（CVP・PSC）を中心に、それを代表する「政治的リーダー」と、他党の「政治的リーダー」との間で政権形成・維持や政策決定のためになされる「協調的行動」が、同一党内の「党内集団リーダー」との関係（列柱の動態）に及ぼす影響に注目し、60 年代ベルギーの政治的不安定の再解釈を行なう。

２．歴史分析

カトリックの政治家、エイスケンスは、58 年に当時の「学校紛争」と呼ばれる、自由主義者とのあいだに生じていた政治的紛争の解決を担い、少数単独政権を形成し、その解決に尽力した。その和平協定の採択に際し、彼は本来キリスト教民主主義者（党内左派）であるにもかかわらず、従来対立していた自由党との連立形成策を採り多数派を形成した。戦後ベルギー政治を担ってきたのは、主としてカトリック内のキリスト教民主主義者と、社会党との連立であった。しかし、ここでエイスケンスは「連立するときには、最も弱い者と組むべきだからだ」と考え、従来の原則を放棄し、（相対的に勢力の劣る）自由党との協調的行動に尽力した。

しかし、この連立形成交渉過程において、自由主義カトリック派（党内右派）のリーダーであり党首でもあるルフェーブルが、エイスケンスの主導権拡大を恐れ、自らの主導権を回復しようとしてエイスケンスに過干渉し、それを拒むエイスケンスとのあいだで対立した。すなわち、自由党との連立を機にカトリックは党内でキリスト教民主主義派と自由主義カトリック派とのあいだの、いわば主導権争いによって内的に不安定化するようになった。以降、ルフェーブルはエイスケンスを失脚させようと行動し、結局、党内支持を確保できず、まもなくエイスケンス政権は崩壊するに至る。

その後、総選挙を経て、ルフェーブルを首班とする社会党との連立政権が成立した。これは、自由主義カトリック派の代表であるルフェーブルと、本来結びつきようのない社会党・スパークとが、当時のエイスケンスの行動に対する批判によって結び付いた、やはり原則放棄的、「不自然な」政権であった。本政権において、カトリックはさらに大いに動揺した。とくにルフェーブルは、自由主義カトリック派であったにもかかわらず社会党の要

求する社会保障拡大政策に尽力した。こうした「不自然な」協調的行動に反発した自由主義カトリック派は、自らのリーダーであるルフェーブルに対する抵抗運動を展開し、65 年選挙の際には、その多くが自由党へ離党することになった。これが、「終焉」と呼ばれる、65 年選挙における政党システムの破片化・変移化の重要な要因である。つまり、協調的行動によって、逆説的にそれにたいする反発が生じ、政党システムの破片化が生じていたのである。

「終焉」選挙以降、ベルギー政治は一層混乱する。まず、破片化は必然的に政権形成を困難とし、重要争点の「凍結」という協調的行動を要求する。さらに、ここまでの過程でカトリックの伝統的エリートは次々と失脚し、党の旧態依然とした体制打破を掲げた「反エリート」、ファンデンボイナンツが市民的支持を得て台頭することになる。彼は他の首相候補者が次々と辞退するなかで、言語問題の「凍結」によって自らの政権を形成する。ところが 68 年初頭、ルーヴァン大学を言語の別に分割しようとする問題が政治化する。この状況においても、彼は「ワンマン」として振る舞い、政権維持に固執しなおも「凍結」を継続した。言語問題を一切無視する政府にたいして、両言語運動の不満は一層高まり、むしろ一致した「反体制的」運動へと変化していく。その結果、ファンデンボイナンツ政権は崩壊し、またその過程で、カトリックは二つの地域・言語政党へと分裂することになった。ここでもやはり「凍結」という協調的行動が、カトリックを分裂させる重要な要因であった。以降、ベルギーは国家統治体制の改革へ向かうことを余儀なくされた。

３．考察

60 年代を通じて、カトリックの政治的リーダーは、危機的状況において「協調的行動」に従事していた。しかし、それにもかかわらず、否、むしろ、それによって内的不満が高まり、カトリックの離党を引き起こして旧来の政党システムを変化させた。また、さらに言語問題を一層先鋭化させ、党の分裂を促した。この点では「協調的行動」が、レイプハルトの主張とは逆に、列柱構造を不安定化させたと言える。とくに、彼が維持安定のために最も重視した「原則放棄」行動は、それが帰属列柱・党内の不満を高めやすい傾向にあった。

以上の逆説的な帰結は、筆者の考察によれば、この時期のエリートが、不満を高めた党内集団への補完的動員を欠いていたために生じていた。さらに、とくに本研究で取りあげた時期の政治的リーダーは、自らのポストを獲得・維持することに過度に囚われたために、帰属集団にたいする補完的な動員行動を欠いていた。その意味では、ベルギーの 60 年代不安定とは、エリートの行動と、それを規定した動機、つまり主体的要因にも負うと言える。すなわち、列柱構造の不安定化がいったん生じたとして、それが必然的、不可逆的に自己崩壊へと進んだわけではなく、もうワンクッション必要だったのである。列柱の構造がいかなる状態であろうとも、主体は生き延びようとし、そして、相対的に平和裏な状況においては、主体は自らの支持集団を省みず、自らの権力欲に従い行動する。そこにベルギーが混乱した重要な要因があったのである。

本研究は、本邦初のまとまったベルギー政治史研究であるとともに、60 年代のみならず現在の、破片化を続けるベルギー政党政治へのイムプリケーションを含み、さらにはエスニック紛争における政治的アクターの行動の重要性と責任とを指摘する重要な論考である。